

明日への一歩

②

「10年かけて築き上げた農場が一瞬で消えた。それからもう1カ月。何が長くて、何が短かったのだろうか」

東日本大震災で14分の農地を失った陸前高田市の農業生産法人アグリランド高田は、再生への一歩を踏み出した。社長の畠山修一さん(56)は、再生への一歩を踏み出した。社長の畠山修一さん(56)は、再生への一歩を踏み出した。

街復興のけん引役に



約1・3分のビニールハウスは押し流され、定植間近のトマトも丸ごと喪失。がれきの山を前に、「もう駄目だ」と絶望した。

「これまでに逃げた社員4人全員が無事だった時、水はけの悪い土地で試行錯誤してきた10年間の思いが走馬灯のようによみがえった。

契約継続し全力で支援

カゴメコンシューマー事業本部生鮮野菜事業部 東日本営業グループ・石田信一郎担当課長(38)

陸前高田は気候がトマト栽培に適している。生産者の意識も高く、非常に優秀な産地だった。これまで届いたお客さまの声の中にも、陸前高田産のトマトに対するクレームは一切なかった。弊社は通常、最低50ヘクタールの規模があり、近い将来1ヘクタール以上を増える見込みがある産地との契約を基準としている。



早急な支援を

同市米崎町のビニールハウスは、「高田型農業」の夢を表現した自慢の農場だった。晴天率が高く夏場に冷涼な気候を生かし、大手食品メーカー、カゴメの独自品種などを契約栽培。冬場はイチゴを生産し、年間の売り上げは水稲と合わせて約3千万円に上っていた。

いわて 東日本大震災

再生の船出 支えたい

水産大学の加藤さん(出身)

水産大学校(山口県下関市)の練習船「耕洋丸」(2355トン)は11日まで2日間、宮古港に寄港。したと加藤さんは、食料や衣料品などの支援物資を陸揚げした。実習生で山田町職空出身の加藤めい子さん(28)も乗船しており、被災地の力になろうと活動している。



町職空に住む祖父父母を気に掛けていた。震災発生後1週間ほどで親戚を介して無事を知ったが、被災地の惨状を見聞するにつけ不安は残ったままだった。

練習船で宮古に寄港 懸命に物資陸揚げ

避難所市民に渡した料理や大浴場での入浴、映画上映などのサービスを受けた。大船渡市三陸町喜味わえて最高だと満足そうだった。

希望照らす夢灯り

宮古市市民が150個ともす。宮古市栄町の宮古駅われた。市民が1500個の夢灯りに火を灯り、被災地への思いを込めて点灯し、「この光が被災地を照らす」と静かに願った。

不安な気持ちケアを



大船渡市のリアスホールで避難生活。自営業。海山悦子さん70。全国からの温かい言葉切だと感じている。

津波でんでんこ

「伝えること」が使命



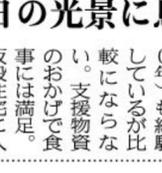
陸前高田市で被災し、盛岡市の松園第2病院で療養中。笹崎浩丸さん43。職場の釣具店から使命だと思ふ。

新しい命の無事祈る



特に若手、宮城県への被害にショックを受けている。自分も6月に出産を控えるため妊婦さんへの心配り。準備など思い通りにならないと思ふが、新しい命が無事生まれることを祈っている。

あの日の光景に鳥肌



伊藤博子さん68。砂煙を上げて家々をのみ込む光景に鳥肌が立つ。津波(1996年)も経験しているが比較にならない。支援物資のおかげで食事には満足。仮設住宅に入り、少しでも前の暮らしに戻れたらうれしい。

～被災地へのメッセージ～

盛岡市南山北1丁目。タクシ運転手。佐々木達也さん(58)。待つていて。信じて乗り越えてほしい。